

# 大陸（南支）

## 近衛歩兵の一員として

### 南支に戦う

福島県 原 久 男

私は農家の長男として生まれましたが、僅か三歳の時に母（二十四歳）を失いました。父は元々養子でしたので祖父母と折り合いが悪く、私を置いて生家に戻ってしまいましたので、私は祖父母に育てられました。

貧しい農家ですから私は高等小学校を出て、夜間には青年学校で学びました。当時の高等科は、僅かです。が授業料を取られました。父は亡母の妹と再婚して一

男一女をもうけています。独りぼっちの私にとって薄い縁ですが異母弟、異母妹の存在は貴重なものでした。

昭和十三（一九三八）年五月の兵隊検査の結果、甲種合格となり機関銃兵と宣告され、続いて十二月一日現役兵として近衛歩兵第二連隊に入隊すべしとの通知があり驚きました。

近衛兵と言えば天皇をお守りする役目であり、選定に当たっては家庭の状況、思想、操行など本人はもちろん、親類、縁者に思想、犯罪に関し問題無いか厳重な調査があるものと聞いておりましたから、なぜ私が選ばれたのか不思議でなりません。

村からは十年前に一人近衛兵が出て以来のことだそう、私ももう一人が選ばれました。何しろ名誉なこ

とですが、祖父母を残すことが唯一の心残りでした。

十二月一日、東京九段の宮城の田安門に入った近衛連隊の兵舎前に集合しました。全国から集まった優秀な人達の一員として、緊張感はますます高まり、帽章が単なる星章でなく、橘の葉に包まれた、如何にも近衛らしく、支給された服も普通は三着だそうですが近衛は一着余分の四着も支給されました。「近衛は全陸軍の模範であれ」と中隊長新井大尉の言葉でした。

所属は近衛歩兵第二連隊（富永恭次大佐）第三大隊（吉田嘉久少佐）機関銃中隊（新井隆夫大尉）で、因みに中隊長の父君は新井亀太郎陸軍中將で、昭和二年支那駐屯軍司令官、第七師団長（旭川）などを歴任された人です。中隊長は、もちろん陸軍士官学校出身のバリバリの職業軍人です。

予備役召集の人は一人もいない現役ばかりの連隊ですから、新兵の訓練もそれは想像以上にきびしく、何事も「近衛は皇軍の模範たれ、名誉を傷つけることなかれ」をモットーに、ピンタは強い兵隊を作るために必要だと言われました。宮城の警備は一昼夜交代の勤

務でした。

連隊長は昭和十四年三月に深堀遊亀大佐が着任されました。のちに中將になり、第三二二師団長になっていきます。

昭和十四年六月、きびしい訓練が終わり、一期の検閲がすんで一等兵になり、宮城の警備、御用邸の警備にはげんでいるうちに、十一月三日動員令が下り、近歩一連隊と近歩二連隊で近衛混成旅団編成の命令が下り外地に出征することになりました。そして旅団長に桜田武少將が着任されました。

機関銃中隊にも応召兵が続々入ってきて活気が溢れました（近衛の外征は日露戦争以来とのこと）。ほとんどが三十歳前後の昭和五、六年兵でしたから、私達初年兵はいつまでも初年兵扱いでした。応召兵は神田須田町に宿営でした。

十二月一日付で一選抜の上等兵にはなりましたが、どこを向いても年上の古参兵ばかりですから頭が上がりませんでした。

十二月一日宇品出港、八日、中国広東省黄埔港上

陸、九日、西村に到着、同地付近の警備勤務に従事しました。

十二月二十日から翌十五年一月四日まで、初の作戦に参加しました(翁英作戦)。この作戦は近衛兵として初参加の上、協同作戦する相手は九州久留米の強豪第十八師団で、戦争上手と評判なので将校さんは神経をとがらせていました。「久留米に負けるな」が近歩の合言葉でした。

中国軍は道路を至る所で切断しているので、馬部隊の皇軍は迂回することが多く難儀しました。

第十八師団は、雑のうと水筒と鉄帽と銃だけを持って作戦に出かけている。食べ物はずべて現地で、しかも中国馬に鍋釜なんでもつけてという軽装であるとのことでした。

これに対し近衛は、一週間分の米と缶詰でリュックサック式背のうはパンパンにふくれています。近衛は「敵地に糧を得る」こととはしない方針ですので行動がどうしても鈍重になります。この作戦では第二大隊長

や第二大隊長が戦死する等損害を受けたようです。

昭和十五年一月五日、正月の加給品がたくさん来たので皆で飲み食い、大いに英気を養っていた夜、突然自動車に乗せられ黄埔に向かいました。砂ほりを全身に被り、目だけがぎよろぎよろして誰彼の識別は困難でした。

実はこの時、広西省の南寧の第五師団(広島)が苦戦中で、その救援に我が桜田旅団(近衛)が第十八師団と共に海路向かったのです。上の偉い方は分かっているのですが、我々下の者はただただ命令のままに前に進むのみでした。

一月十日、蚊虫山村に上陸、そこで天幕露営。我が第三大隊の編成は大隊本部、歩兵四個中隊、機関銃中隊、大隊砲小隊、小行李こぎょうとなっており、機関銃中隊は四個小隊で八個分隊に分かれ、一分隊一機関銃でした。

普通は各歩兵中隊に一機関銃小隊(二分隊)が配属になり全員が顔を揃えることはありませんでした。

蚊虫山は海岸なので飯盒炊さんが塩水なので閉口しました。翌十一日から賓陽作戦に参加。欽県、小董墟を経て十七日那香墟に至ると四方から敵弾が来て包囲攻撃されましたが応戦、夜になりました。

彼我の銃声入り混じり混乱の時、吉田大隊長が大声で「日本軍射撃止め！」と連呼したので敵陣の方向が分かり「突っ込め！」で撃退したのでした。

中隊長は久しぶりに四個小隊全部掌握して戦ったので戦果を上げられ満足顔でした。この時、私は機関銃中隊の第三小隊・刈込少尉の指揮する第六分隊に属し、分隊長・荒川伍長の三番銃手でありました。

刈込少尉は幹候出身ですが大変ユーモアに富んでおり、殺風景な戦陣中で笑いを欠かさないで下さったのです。例えば敵の迫撃砲を「迫さん」と名付けたり、弾の下では誰でも恐ろしいもので、普通、恐ろしさを口に出して言わないものですが、小隊長は「ああ怖かった！」とぬけぬけと言ってしまうのです。

十一日から始まった戦闘は、南寧に向かう日本軍（救援）を妨害する中国軍が待ち構えているものです

から、七日間にわたる山間地の戦闘で、大隊も戦死三十人、戦傷九十人の損害を受けました。南寧にはいまだ到着できず、第五師団は依然包囲され苦戦中でした。

その後、北進を続け、二月三日賓陽に向かい前進中、中大村付近を陸統として後退中の敵大部隊を知り中大村に向かう。第三大隊は毎時八キロのスピードで前進、敵と遭遇、八つの機関銃が火を吹き、雉射で敵兵をなぎ倒し、逃げる敵兵を待ち構えた歩兵が攻撃する。正に映画を見るような場面でした。

二月十一日、軍司令官安藤利吉中将より感状が桜田部隊に授与されました。出征してから僅か二カ月余で感状を頂く部隊は珍しいことでした。

七月二十日、近衛混成旅団解散。我が連隊は近衛師団第一旅団となる。師団長飯田祥二郎中将となる。

八月一日、深堀連隊長内地へ、後任小菡江邦雄大佐殿。十五日第三大隊長一色少佐に変わる。

九月一日、インドシナ派遣軍編成に入る。

十八日欽集結、二十六日三時出發乗艇八時コック  
トラン上陸、安南人農夫三人歩行中、日本人そっくり  
なのに驚く。

九月二十六日十時、フランス軍白旗掲ぐ、十四時ハ  
イフォン市中行進。

十月十日、バクニンに移動、約六カ月間援將物資の  
封鎖のため警備する。

十六年三月二十七日、バクニン出発。

四月七日、字品上陸。

四月八日、品川着習志野廠舎（検疫消毒のため）。

四月十七日、市内行進懐かしの兵舎に帰営。

七月八日、十八日、天皇、皇后の儀杖兵に服務。

十一月二十九日、兵長、下士勤務を拜命。

十一月三十日、善行証下付、現役満期除隊。

除隊後八日経った十二月八日、大東亜戦争が始ま  
り、召集がいつ来るかと、待てど暮らせど遂に赤紙が  
来なかった。

終戦までは青年学校の指導員として後輩の軍事教練

の指導に従事していました（夜間二時間）。

除隊後は農業に従事し、翌十七年に結婚し三男一女  
をもうけました。

長男（昭和二十年生まれ）は、地元の喜多方の電機  
会社の役員として勤務。長男は会社の女子と結婚し、  
孫（女子）はエアシステムのスチュワーデス勤務。

長女（昭和二十一年生まれ）の夫は、村役場収入  
役。

次男（昭和二十三年生まれ）は、東京の会社に就  
職。現在広島に勤務中。

三男は熱塩加納村役場に勤めている。

祖父は昭和三十三年八十三歳で亡くなり、祖母は昭  
和十七年私に除隊した一年後六十六歳で亡くなりました。  
た。

平和祈念事業特別基金の慰藉事業により平成二（一  
九九〇）年に海部俊樹名の書状と銀杯を頂きました。  
また昔のことですが、皇紀二千六百年記念として昭和  
十五年一月に勲八等白色桐葉章をもらいました。

近衛歩兵第二連隊は明治七（一八七四）年一月二十

日編成され、一月二十三日に軍旗が親授された。日本最古の連隊であり、歴代の連隊長には有名な軍人が就任されています。

兵舎はありませんが、九段会館の庭に記念碑が現在でもあります。

北の丸公園にも碑が建っています。戦友会は現在でも盛大で、会誌「たちばな」は第六十三号に達し、会の顕功章に応じた寄付金も集まり、立派な写真集は貴重なものとなりました。

私は今でも近歩第二連隊の一員であることを誇りに思っております。